

美術史学

◇教員◇

教授：佐藤康宏、秋山聰

准教授：高岸輝

◇学生◇

学部：29名、修士課程：10名、博士課程：12名

(1) 美術史学を選ぶ

そりゃあもちろんこういう文章を綴る側は、美術史学を選んでよかったと思っているわけです。たとえ悪魔が現れて、「もう一度若いときのあんたにもどして、満島ひかりちゃんといっしょに人生をやりなおせるようにしてやってもいいんだぜ」などと誘惑しても、たぶん（かなりためらった後で）やっぱりいまのままでいいと答えるでしょう。でもあなたは迷っている。そうですね。当然です。いままでやったことないからおもしろそう、という選択のしかたもあり、教養学部で美術史の授業が開講されるようになった近年でもそれは有効かもしれませんが、こんなものに人生を賭けてだいじょうぶだろうかと考えるのが普通ですからね。

悪魔ではないので正直に誘惑しましょう。あなたが形や色に惹かれるというのなら、美術史をやってみたらどうでしょうか。美しい絵や彫刻や建築が好きだ。美しい人間や景色や動植物が好きだ。ぜひそういう人に来てほしいですね。ただ、「ちょっと好き」くらいなら趣味にとどめた方がいい。「とても好き」でないと。好きというところから始めて、対象をあなた自身の眼でよく見て、自分の頭で考える癖を持つのがだいじです。造形というのは言葉よりも直接感覚に訴える要素が多いわけで、言葉を理解するのとはまた別の感受性が必要なんです。学校ではほとんどそんなことを教えませんし、むしろ学校の勉強で摩滅しやすいのがそういう感性です。だれかが書いた言葉を寄せ集めて、きいたふうな文章をでっちあげるのは、美術史学ではありません。そういうのが好みの方は、ほかの専攻に進む方がいいでしょう。自分自身が見て感じるものに執着がなければこの学問は始まらないと思って下さい。

美術史学の何が人を引きつけるのでしょうか。高階秀爾『名画を見る眼』（岩波新書、1969年）のあとがきには、「精神的なものと物質的なものとが微妙にからみ合っている」ところが芸術というものの不思議だと説かれています。美術史を考えるおもしろさは、まずここにあるでしょう。精神は目に見えません。しかし、それが物質にひとつの形を与えたとしか思えないくらい、時代によって、地域によって、作家によって、さまざまに異なる美術が作られてきました。ヨーロッパでも中東でも、アジアでも、美術史は、人が世界や人間をどう認識していたかについて、その変遷のありさまを鮮やかに示してくれます。

逆にいえば、布や紙に絵具が塗ってあるに過ぎないもの、木材や石膏の塊でしかない物質が、私たちを感動させるのも、それらを形作った精神の働きを宿しているからでしょう。それを作った人々も社会もとうに滅びてしまったというのに、美術品は現代に生き続け、過去に存在した祈りや欲望、感受性や美意識について、忘れるな、思い出せ、想像せよ、と語りかけてくるのです。具体的な物、イメージをめぐる考えながらそれを織り成した精神や社会の広がりを探索する作業は、ひかえめにいっても、とてもおもしろいものです。

つまり、政治史や経済史を研究するのと違って、美術史は、物質としていま目の前に存在する〈過去〉から出発します。ですから、美術は好きだけれど歴史学とは何だか肌が合わない気がするという方にもけっこうなじみやすい学問だと思います。相手にする時代は古代から現代まで、地域はヨーロッパ、イスラム、インド、中国、韓国朝鮮、日本、アメリカなどに及びますから、相当に気の多い人でも熱中できる対象を見つけるのはむずかしくないはずですが、間口は狭く見えるかもしれませんが、入ってみると実に広い領域があると断言できます。

（2）美術史学を学ぶ（駒場にて）

総合文化研究科・教養学部三浦篤教授の美術史関係の授業は受けているでしょうね。文学部からも駒場に出かける授業があります。2018年度には高岸、芳賀、塚本准教授の学術俯瞰講義や初年次ゼミナールを受講するといいいでしょう。進学が内定した2年生は必修科目である「史学概論」を履修するとともに、また佐藤教授の「18世紀京都画壇誌」を聴講に本郷の方へもどうぞ来て下さい。

進学のための要求科目は特にありませんけど、思想・文学・歴史に関する教養と好奇心は、専攻を云々する以前の文学部生の必須条件です。受験勉強疲れなのか駒場での点取り競争のせいかわかりませんが、近年、文学部の学生まで広い意味での文学を楽しむ心が衰えているように危惧します。感受性と発想の引き出しを

増やすために若いうちの濫読はだいじです。言葉についていえば、やがて日本・東洋美術史の研究では古文、くずし字、漢文、中国語などを読む必要が生じるでしょう。西洋美術史では、どの分野を専攻するにしても英語、フランス語、ドイツ語は読みこなせた方がいいですし、これら以外に対象に応じて古代ギリシャ語、ラテン語、イタリア語、オランダ語、スペイン語などを習得しなきゃなりません。しかし、もちろん外国語は進学してからも勉強できます。好きな美術のためなら古語や外国語のひとつやふたつは苦にならないと思っただければ幸いです。

各地の美術館、博物館、各種展覧会場、ギャラリー、寺社などにはこまめに脚を運ぶのがいいし、芝居や映画もたくさん観た方がいいですが、美術史に興味を持つような人なら当然そうしているでしょうね。美術史関係の本は関心に応じて読んでおけばいいと思います。あまり領域を限定せずに、いろいろなものを見たり読んだりして下さい。

(3) 美術史学を学ぶ(本郷にて)

美術史学専修課程専任の教員は、日本美術史(近世)、西洋美術史(中近世)、日本美術史(中世)を専攻しています。それぞれ講義・演習を担当します。どんな研究や授業をしているかは大学のウェブサイトでも見て下さい。ほかに文学部次世代人文学開発センターの芳賀京子准教授が西洋美術史(古代)、東洋文化研究所の板倉聖哲教授と塚本鷹充准教授が中国絵画史、榊屋友子教授がイスラム美術史の専門家として授業に参加し、厚みを加えています。三浦篤教授も、毎年本郷で19世紀フランス絵画史についての講義を受け持たれています。

このほかにも、学外からもできるだけ多くの講師にきていただき、講義の充実を図っています。2018年度でいえば、矢島律子講師(町田市立博物館課長)が中国陶磁史について、岩佐光晴講師(成城大学教授)が日本仏教彫刻史、水野千依講師(青山学院大学教授)が西洋宗教美術史、渡辺晋輔講師(西洋美術館主任研究員)がルーベンスとイタリア・バロック美術、天野知香講師(お茶の水女子大学教授)がモダン・アートの諸問題、田中正之講師(武蔵野美術大学教授)が20世紀後半の西洋美術について講義されます。

こんなぐあいで、実に受講しきれないくらいの講義・演習があるんですが、できるだけたくさんの授業に出てみるのがいいでしょう。少なくとも3年生のときは、日本・東洋美術、西洋美術両方の講義・演習に出席すべきですね。日本・東洋美術史は自分自身が属する文化圏の美術を具体的にどう見るかという点で、西洋美術史は美術史学の理論と方法という点で、あなたがこれから何を勉強するに

せよ、どちらも役に立つはずです。

そもそも本や論文を読めばわかること以外に、体育実技や料理の実習に近い要素が、美術史の授業にはあるんじゃないでしょうか。たとえば作品そのものや映写された画像に対してどう反応するかといった感覚的なことです。授業は少人数のことが多いですから、積極的に発言・質問すればそれだけ得るものが大きいと思います。美術作品を実際に見るのが重要ですから、講義や演習で首都圏の美術館・博物館に見学に行くこともあります。また、演習のひとつとして、毎年春か秋に4、5日間程度の関西見学旅行を実施しています（台湾・韓国に行ったこともあります）。見学対象は京都、奈良などの寺社や美術館・博物館にある日本・東洋の美術作品が中心ですが、関西の西洋美術のコレクションや、関西でしか観られない西洋美術特別展覧会の見学などがオプションとなることもあります。親交を深めるよい機会でもありますから、ぜひ3年生のときに参加して下さい。

一般的に言って、授業以外にもできるだけ美術史の研究室に顔を出した方がいいですね。そこにあるいろいろな書物や雑誌を見慣れるというのは、もちろんだいいじなんですけれど、そこにいろいろな人と知り合い、話をするのがまたいいです。先輩や同期生との日頃の接触から学ぶことは、わりとたくさんあります。別に美術史に関することじゃなくてもね。いまは美術史への進学者の数が多いため、親密に交流するのにはあまりいい条件じゃないかもしれませんが、逆に、それだけ多様な人間がいるのを利点として切磋琢磨してもらえればいい、と思います。

美術史学専修課程では卒業論文を重視します。多くの人にとっては最初で最後の論文になるわけですから、ひとつ力作を書いて下さい。大学院に進まず就職していく人でも、よい論文であれば研究室で発行している『美術史論叢』という紀要に掲載することがあります。幅広い好奇心を保ちながら自分の興味を明確にしていけば、4年生になるころには論文のテーマも自然に決まるでしょう。教員の希望としては、実際によく見た作品を中心に考察してほしいということ、できれば評価の定まったもの、つまりはでかい相手にあなたなりに挑んでほしいということです。近頃はひとりの作家、ひとつの作品についての論文が多いんですが、これは何も決まった形式じゃありません。6月中旬、卒論指導会というのが開かれます。4年生が教員と同級生の前で卒業論文の構想を発表し、質問や助言を受ける会です。もちろん、それ以前でも以後でも個別に教員に相談することができます。先輩にも相談して下さい。夏休みの期間に文献などを調べ、それ以降、試行錯誤を繰り返しながら執筆を進めることになるでしょう。

(4) 卒業後のこと

出版業・放送業・広告業などで専門知識を活かしている先輩もいますが、それを別にすれば、美術史を学んだことは就職に関して特に有利にも不利にもならないようです。政府や地方自治体、商社・銀行・製造業など、ごく普通に就職していく人が多いですね。近年は東京大学の職員になる人も続いています。

美術館・博物館の学芸員になる希望を持つ人は少なくないかもしれません。外から見るほど優雅な仕事ではなく、そうかんたんになれる職業ではない、ということは認識しておいた方がいいと思います。学芸員の資格自体は必修の単位を履修すればだれでも取れるんですが、美術館などからの募集の際には大学院の修士課程修了以上のキャリアが求められるのが普通です。学部卒業段階での募集もないわけではありませんが、いずれの場合でも、公募は不定期で少人数の募集しかありません。採用試験は館ごとに行なわれ、それに合格して初めて採用されるわけです。東京圏でなければいやだなどといっている人は就職できません。全国どこの美術館でも働く意欲が必要ですし、実際に先輩たちは東北から四国・九州まで各地の美術館・博物館で活躍してきました。近年は、各地の館から学芸員採用の募集が出ているのに、受験しようとする大学院生の数が不足しているというのが現状です。何とももったいない話です。

大学の教員になるのは、より狭い道です。まず博士の学位を取得する必要があると考えて下さい。西洋美術史を専攻する場合、外国の大学で学位を取ることを伝統的に推奨していますが、留学を伴わない専攻領域であっても、博士号を得るまで、さらに職を得るまでには何年もの時間がかかります。

大学院に進学するには、すぐれた卒業論文を書き、学外からの受験者とともに日本・中国・西洋の美術史すべてに関する専門科目と、外国語2か国語の筆記試験を受け、それらにパスした上で、論文に基づく口述試験に合格しなければなりません。進学後も就職の保証があるわけではないんですが、ただ一方で、これまでは、ともかくよい研究業績を積み重ねた人は、多少の時間差はあっても、美術史研究と結びついた職場を得てきたのも事実です。そういう先輩の多くが、明治以来現在に至るまで、日本の美術史学研究の中核を形成してきたのです。美術史に直接関わる職業に就くのは容易ではなく、好きなことを続けるためには普通の幸福を少し犠牲にしながら努力しなければならないかもしれません。でも、その覚悟があり、自分の資質を信じるならば、ぜひ大学院に進み研究に励んで下さい。